
ろくでもない世界に

黒猫白猫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ろくでもない世界に

【Nコード】

N1655J

【作者名】

黒猫白猫

【あらすじ】

これは様々な人間の人生を描いた物語はである。

第1章「ろくでもない世界で」

こんなろくでもない世界なんて、消えて無くなればいいと思ったことが誰でもあると思う。

そう思ったきつかけは色々だ。

自分の周りの人間で、自分の周りの環境とか色々。

だけどそんな考えはいつの間にか消えてしまっている。

例えば少し自分にとって良い事があると忘れてしまい、忘れてしまっていた事さえも忘れている。

それは簡単に言ってしまうえばそれほど重く考えてはいないと言う証拠だ。

だけど、そうじゃない人もいる。

常に自分の周りの世界を否定し続ける人間もいる。

多分その人にとっての世界と言うのは忘れてしまう人に比べて相当に酷くろくでもない世界なのだろう。

それでもその人はそんな世界に生き続けている。

だが、そんな中でも本当に世界を消したいと思った人間が自ら命を絶つのだろう。そして自分と言う世界の中心を無くす事でその世界を壊すのだろう。

だけど、そう考えると世界と言うのは百人百色と、人の数だけあると言うことになる。

その数多くある世界で少しの幸せも感じられない世界はそう無いだろう。

誰の世界にでも喜びや楽しみは多かれ少なかれあるはずである。

だけどその喜びや幸せ、楽しみが人によって感じかたやとらえ方は違うもので、幸せだと感じなかった人達が、先に言った通り、自分の世界に絶望するのである。

そこで私が何を言いたいかと言うと、世界と言う概念や考え方は人によって違いが生じる。

そのわずかな違いで人はその人生を左右させるものだ。

例えて言うなら「こんな世界」と言うのは自分の知りうる自分の周りの世界を言っているのか、それとも他の人の世界も含めて言っているのかはかなり重要である。

もし後者であった場合その人は自己中心的過ぎる考えの持ち主であり、そんな人間の一時の感情で全ての人の世界を否定する資格はない。

それはつまり、人それぞれの世界があると言う概念を知らないから言える事だと言える。

世界に絶望してしまう人間は恐らく、世界は一つだと考えてしまっているのだろう。

そこで、これから始まる物語では毎回自分の世界に絶望した人間がいかにして自分世界を変えて行くかを書いた物である。

そして最初の人間はもっとも愚かな人間であると言える。

自分の世界にある幸せを感じ方やとらえ方のせいで自分の世界がらくでもないと感じてしまっている。

そんな彼がどの様にして変わっていくのだろうか皆さんに見ていただきたい。

一人目「感情の世界」(前書き)

この話は人が持つ『感情』がその人間の世界を変えて行くと言っても
つとも世界の変わり方の典型的な話ですね。
では、ご覧ください。

一人目「感情の世界」

「はあ〜つまんねー世の中…」

一人の人間が溜め息をついている。

彼の名は『田代優哉』今年成人になったばかりだ。

現在は都内の大学に通っているのだが、友達と呼ぶ事の出来る人間はあまり多くはないのだが、それ以外は普通の男性だ。

そして今、話し手をさせて頂いている私はこの小説のストーリーライターを任されている。ピエロと申します。

と、私の自己紹介はこのくらいにして彼の物語りの続きを見てみましょう。

「優哉、溜め息なんかしてどーしたの？」

男に話しかけてきた彼女は『加藤里沙』男とは同じ講義を受けたのをきっかけで知り合った数少ない友達の人だ。

「何でもないよ、ただなんか面白い事ないかなあと思っただけ」
どうやら男は彼女に気があるみたいだ。

え、どうして分かるかって？それは私は事前にこの物語りを見ているからですよ。

貴方様に楽しんで見ていただくために事前に下調べをしてみると言うのが普通の心掛けですからね、では続きを。

「面白い事って例えば何さ？」

「え…えつと〜例えば誰かと付き合うつとかかな」

男は女性と話すのが苦手でした。

だから最初は彼女と仲良くなるまで大変だったらしいですよ。

「そっか、まあでもきつといい子見つかるよ、優哉ならね」

彼女は男の気持ちには全く気付いてませんね、まあ男もそういった意思表示をした事がないので当然と言えば当然ですが。

そうそう、彼女には今付き合っていると云う男性がいます。

その事を彼は知りませんでした。

そして男は自宅に戻り、一息つくると一本の電話が鳴りました。

「もしもし……え、本当なんですか？……はい……はい、ありがとうございます
ございました」

どうやら電話の相手は警察だったらしいですよ。

何でも彼は何日前に、必死にアルバイトで貯めたお金で買ったバイクを盗まれてしまって、それがボロボロにされて放置されていたと云う話だったらしいですね。

「くそ……！何で俺がこんな目に、ようやく買ったバイクは盗まれたあげくにぶっ壊されて、好きな子には相手にされなくて……」

おやおや、どうやら彼はショックな出来事のせいで、全てをマイナスにとらえてしまっているみたいですね。

第一に相手にされないと言っるのは間違った表現で、彼女はちゃんと彼を相手にしているじゃないですかねえ。

皆さんもあるんじゃないですか？こうやって考えたこと、きっとありますよね。

自分で思っているよりも、周りの人は貴方を気にかけていると云うのにそれが分からないと言っ人は結構いるものです。

それから男はソファに座り、何やらうつむいて考え事をしています。余談ですが大学入学を期に、一人暮らしを始める人は多いですが男もその一人だそうですよ。

一人暮らしの男にとっての主食は大体がコンビニ弁当だった。

その後しばらくたった頃、いくらショックな出来事があってもお腹は空くみたいで、男は近くのコンビニで弁当を買って家に帰りました。

不幸と言うのは続くもので、男は家を出てからすぐにたまたま通り掛かった高校生に囲まれてしまいました。

「なあ肩ぶつかっておいてお詫びの一言も無いのかよ？」
もちろん肩などにぶつかったはけじゃなく、高校生の勝手な言い掛かり。

でも歩いていて肩がぶつかるのは中々珍しい光景ですよ？少なくとも私は見たことがありませんね。

そして男はボコボコにされた揚句にお金までもってかれたと……どれだけついていない人間でしょうか。

「こんな世界……」
遂に男はその言葉を呟いてしまいましたね。とまあ今日はこの辺にてお別れですね。

ではこの話の結末はまた次回と言う事で、しばしのお別れです、それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1655j/>

ろくでもない世界に

2011年1月28日11時29分発行